陳師道の詩と詩論

横山伊勢雄

一、はじめに

宋代の三百餘年にわたつて作られたいわゆる宋詩は、いずれも唐詩を繼承している點で、その軌を一にしている。詩は唐において集大成されたという認識の上に、それを繼承しようとするのであるが、ただ何を如何に繼承したかという點でその樣相を異にする。さらにその繼承も、單に唐詩を模倣するにとどまつたか、それともそこから新しいものを發掘し、それを發展させたかどうかという點に、宋詩としての特質を有するか否かがかかつてくるのである。このような唐詩の繼承と發展という觀點から、宋詩の展開の相を、ごく大まかに展望すれば、大體、五つの群に分けることが出來る。第一は、宋初の楊億等の西崑體に代表されるような、晩唐詩を皮相的に模倣する詩。第二は、歐陽脩や蘇軾等の、唐詩の抒情性や表現法を繼承しながらも、敍述性・哲學性・悲哀の止揚といつた新しい展開を見せる詩。第三は、黄庭堅、陳師道等から江西詩派に至る、より唐詩に密着しようとする擬古典主義的な方向の詩。第四は、南宋の四大家と呼ばれる陸游・楊萬里等の、唐詩と蘇軾を中心とする北宋の詩との融合的な方向の詩。第五は、永嘉の四靈や江湖派と呼ばれる詩人達の、中・晩唐詩を模倣的に繼承する詩である。

このような展望のもとに、私はかつて第一から第二への展開の樣相と、第二の詩がもつ宋詩の特質を、梅堯臣を中心として論じたが、(注1) 本稿においては、黄庭堅と共に、第二から第三への轉換の軸をなしていると考えられる陳師道について、その詩と詩論の特質を考察し、その轉換の意味と、第三の詩の方向とを論じてみたい。

二、その生涯と詩

詩人の人生と、その作品とは不可分のものであるから、まずその生涯をたどりながら、詩風の特色を考えることとする。

陳師道、字は履常、一の字を無己、號を後山という。宋史四四四卷の文苑六にその略傳が記載されているが、その四十九年の生涯を、便宜上區分して考えるとすれば、三期に分けることができる。

第一期は、弱年の時から彼が最初に師事した曾鞏の死沒の年、元豐六年（一〇八三年）まで。即ち陳師道が三十歳の年までである。傳によれば、彼は弱年より學に志し、十六歳の時、文を以て曾鞏に謁してその知遇を得たという。彼が曾鞏に師事していた熙寧・元豐の間は、王安石の新法が次々と實施されていた時であつた。曾鞏は王安石の母方の親戚であり、若い頃から親交があり、贈答の詩文も多いが、王安石の新法には贊成しなかつた人である。陳師道も當時王安石の經學が盛んなのを嫌い、さらに熙寧二年には王安石の建議によつて進士の試驗に詩賦を廢し、經義をそれに代えたこともあつて、ついに進士の試驗を受けなかつた。このように、官吏の登龍門に入るのを自ら拒否したことが、以後の彼の生涯を決定づけてしまうのである。元豐四年に神宗が曾鞏に五代史編纂を命じた時、曾鞏は陳師道を史官の一員に推薦したが、朝廷は彼が白衣の故をもつて認めなかつた。このことは、彼に大きな打擊を與えたようで、その後、章惇などが朝官に薦めたときは自ら辭退している。彼を見舞つたこのような事件の上に、さらに師の曾鞏の死が加わつて、彼を失意の底に突き落とすのである。これまでの時期に作られた詩は現存していない。それ故、彼が習作時代にどのような詩を作つていたか不明であるが、詩集の最初に載せられた「妾薄命」二首(注2)は、初期の傾向を示すとともに、曾鞏への敬慕の情の強さを表明している。二首の中から其の一を擧げる。

主家十二樓　　主家　十二樓
一身當三千　　一身　三千に當る

古來妾薄命　古來　妾は薄命
事主不盡年　主に事へて年を盡くさず
起舞爲主壽　起ちて舞ひ主の爲に壽ぐ
相送南陽阡　相送る南陽の阡
忍着主衣裳　忍じて主の衣裳を着け
爲人作春姸　人の爲に春姸を作す
有聲當徹天　聲有らば當に天にも徹るべし
有淚當徹泉　淚有らば當に泉にも徹るべし
死者恐無知　死者　恐らくは知るなからんも
妾身長自憐　妾が身　長に自ら憐まん

魏の曹植の樂府に妾薄命の篇があるが、この詩の詩句にも鮑照や謝靈運の句をふまえるものが見られ、若い頃の彼は六朝詩及び唐詩（白樂天や劉禹錫の詩句をも典據としている）を學んでいたと考えられる。(注3) さらにこの詩は自注に「曾南豐の爲に作る」とあるように、妾に自身を假托し、曾鞏を悼んだものであり、師を失つた悲哀の情があふれている。彼の感情に激し易い性格を示すとともに、彼の詩集の最初に、甚だ悲哀に富むこの篇が置かれていることは、象徴的でさえある。彼には「南豐先生挽詞二首」（卷一）があり、挽詞の秀作とされているが、陳師道の三十歳はこのような哀感のうちに迎えられたのである。

第二期は、元祐八年（一〇九三）まで、即ち陳師道が四十歳の年までである。この時期は蘇軾の知遇を得、その門下と交わりを結んだ時である。蘇軾について言えば、彼は元豐二年八月、筆禍事件のため投獄され、同年十二月黄州へ流されるということがあつた。元豐八年神宗が沒し、新法が廢止されるとともに、蘇軾も中央に復歸、哲宗の元祐元年には翰林學

士となつた。元祐八年、再び新法黨の登場となり、蘇軾は惠州に流され、舊法黨は次々と追放されることになるが、この間の十年間が陳師道における第二期である。この時期の初めは職もなく、貧乏のために妻子を舅の郭大夫に引き取つてもらうほどであつた。次の、妻と三人の子に別れる詩にいう。

別三子（卷一）

夫婦死同穴　夫婦は死して穴を同にするも
父子貧賤離　父子は貧賤なれば離ると
天下寧有此　天下　寧ぞ此のこと有らんや
昔聞今見之　昔　聞き　今之を見る
母前三子後　母は前にして三子は後
熟視不得追　熟視すれども追ふを得ず
嗟乎胡不仁　嗟乎　胡ぞ不仁にして
使我至於斯　我をして斯に至らしむるや
有女初束髮　女有り　初めて髮を束ね
已知生離悲　已に生離の悲しみを知る
枕我不肯起　我を枕として肯て起たず
畏我從此辭　我の此れ從り辭するを畏る
大兒學語言　大兒は語言を學び
拜揖未勝衣　拜揖するも未だ衣に勝へず
喚爺我欲去　爺よ我は去かんと欲すと喚ぶ

此語那可思　　此の語　那ぞ思ふべけんや
小兒襁褓間　　小兒は襁褓の間
抱負有母慈　　抱き負ふに母の慈有り
汝哭猶在耳　　汝の哭する猶ほ耳に在り
我懷人得知　　我が懷ひは人知るを得んや

詩句は杜甫の「北征」や「羌村」の語句をふまえたものが多いが、悲哀の情は陳師道その人のものである。別離の悲哀は「我れ老いて自から食はず、安ぞ我れが如く長ずるを得ん」（憶小子・卷一）という我身の拙さに原因することへの悔恨の念によつて、より深くなる。妻に對しても、「子と夫婦となり、五年に三たび別離す」（送內・卷一）と、別れて暮らすことが多かつただけに、愛情は深かつたようである。このように彼の三十代も悲哀につつまれて始まつている。

こうした時期に、元祐元年、京師において、蘇軾と出會い、その人格にひかれて終生かわらぬ敬慕の念をいだくようになる。また、秦觀・張耒・晁補之など蘇門の詩人達と交わり、その中で自己の詩法を形成して行くのである。元祐元年に「贈二蘇公」（卷一）の詩が作られ、元祐四・六年の兩年には蘇軾の詩に次韻するものが數首ある。陳師道の詩で、蘇軾に關するものは十七首あるが、「平生の師友豫章公」（送劉主簿・卷六）と自から呼ぶ黃庭堅に關しては二首しか見られないのは、興味あることである。彼は蘇軾の推薦で官職につき、また詩に關する知識も蘇軾より多くのものを受けている。しかし、彼はその著「後山詩話」において「蘇詩は始め劉禹錫を學ぶ。故に怨刺多し。學ぶに愼まざるべからざるなり。晚には太白を學び、其の得意なるに至れば則ち之に似たり。然れども粗に失するは、其の得易きを以てなり。」と言い、また黃庭堅の詩についても「その詩は奇に過ぎて、杜の物に遇ひて奇なるにしかず。」と言つて、蘇・黃兩者の詩とも非難している點は、注意すべきである。陳師道は蘇門の君子に數えられ、詩もその點から論じられがちであるが、彼の詩は、直接杜甫を學び、そこから自家の詩風を形成していつたと見るべきであろう。

ともあれ、この時期は生活面においていくらか光明の見えたときであるが、なお曲折がある。元祐二年四月、蘇軾等の推薦によって、徐州の教授となることが出來た。更に太學博士に推されたが、官職にありながら彼が勝手に州境を越えて蘇軾に會いに行つたと讒言する者があり、元祐五年には潁州の教授に移された。このような地方官の生活にあつて、當時の他の詩人と異なる點は、彼に政治や人民の生活を詠ずる社會詩が殆んど無いことである。僅かに「田家」(卷二)の詩が農民の勞苦を詠じて、それらしい要素を含むのみである。彼は社會や人民の生活に眼を向けるよりも、文學に心を集中し、「詩語人を驚かし筆も亦た奇なる」(贈秦觀秦簡・蘇詩・卷二)を目指し、さらに官職さえも「豈に文章の要務を妨げる有らんや」(次韻蘇公督廢歐陽詩・卷三)と、考えて公務に精を出すよりは、文學に精を出していたのである。

第三期は、紹聖元年より死を迎える建中靖國元年までの四十歳代である。紹聖元年、世は新法黨の再登場を迎え、舊法黨の人々は次々と追放され、陳師道も官を逐われて隱棲することとなつた。彼の門人の魏衍はそれからのことを「凡そ四年、左右の圖書を日々討論するを以て務めと爲す。並し其の志は專ら文學を以て後世に名をのこさんと欲するにあり。」(彭城陳先生集記)と言つている。陳師道の詩は現存するもの四百五十一首であるが、その内の約四分の三の三百三十六首がこの第三期に作られているのを見れば、魏衍の言もうなづけるのである。(注4)

陳師道は早くから、官途の出世は意にかけず、林野に悠々適居しようとする志向を有していた。「猶ほ須く心を科學の外に用ふべし」(送賈生兼寄・湖・卷三)「生きては當に意を落鷗の邊に得べし、何ぞ用ひん候に墮鳶の外に封ぜらるるを」(次韻蘇公西湖徙魚・卷三)と言うのがそれである。だが、官途について名をあげようとする志向があつたことも自から認めている。「我は昔 謝公門下の士、早年妄りに作す功名の意、如今老いて寄す潁河の東、九泉深しと雖も此の公に愧づ」(送賈生・卷三)と。仕官を求める心と、野にあろうとする心の、相矛盾する感情の振幅のうちに揺れ動いていたのが陳師道の生涯であり、思想のさまであつたのである。隱棲し、自己本來のものへ沈潛しようとした四年の後、元符三年七月には、「孤臣白首にして新政に逢ふ、(中略)、富貴は本々吾輩の事にあらず、江湖安ぞ便ち相忘るるを得ん」(和寇十一晚望・白門・卷十二)とつぶやきながら、いずれにも徹

し切れぬままに、棣州の教授の職につき、更に十一月には秘書省正字となつたのである。これは、この年の正月に哲宗が沒し、徽宗の卽位とともに大赦令が出され、舊法黨の人々が再び舊職に復し出した社會狀勢にもよるが、貧苦に驅られてのことでもある。彼はかつて、無爲に過ぎ行く日々を、老いへの歎きとして繰り返していた。「世を棄てて怒を待たず、老境逶遲たるを厭ふ」（聚夜有懷・卷五）、「暮年に淚を垂れて西風に向ふ」（東山詩外大父墓・卷五）、「老子の形骸薄暮に從ふ」（次韻晁無斁冬夜見寄・卷五）、「秋床に歸臥するは愁に緣るにあらず、病と衰と謀りて老の仇を作す」（絕句・卷九）、「老來才は盡きて新語無し」（和賈充小雪・卷九）などいずれも第三期のものである。ついに、「世事每に此の如し、我が生亦た何ぞ娛まん」（寄賈充・卷九）「翰墨日々に疎く身日々に遠ざかる、世間安ぞ虛名を尙ぶを得ん」（早起・卷九）と諦觀を持つに至るのである。「一夢なり人間の四十年」（八月十日・卷三）、「熟知す一世は一夢の如きを」（寄晁貳之兄弟・卷四）と人生を見るのもそれである。このように悲哀に沈む彼を慰めてくれるのは、友人知己であつた。彼の詩の半ばまでが、贈答・次韻・送別の詩で占められていることが、それを物語つている。だがそれさえも、遠く離れれば悲哀の種となる。「熟知す衰老にて別れを爲すことの難きを、聲問應に須く續續と來るべし」（送提刑李學士・卷八）「千里に詩を馳せて別離を慰むも、詩來りて吟詠すれば轉た悲思」（寄答泰州參待郎・卷八）というように、元符二年、遠く海南島に流されている蘇軾を思う詩にそれは顯著である。

懷遠　（卷九）

海外三年謫　海外　三年の謫
天南萬里行　天南　萬里の行
生前只爲累　生前　只だ累を爲す
身後更須名　身後　更に名を須たんや
未有平安報　未だ平安の報有らず
空懷故舊情　空しく故舊の情を懷ふ

斯人有如此　斯の人にして此くの如くなる有り
無復涕縱横　復た涕の縱横たる無からんや

正字の官についても、それは從九品の閑職にすぎない。それさえも「敢て恨む十年の遲きを」（除官・卷十二）と自から言う如く遲きに過ぎたのである。この年の冬に作られた「寒夜」（卷十一）の詩は、これまで述べて來た彼の生涯を象徴する作品といえよう。

留滯常思動　留滯すれば常に動かんことを思ひ
艱虞却悔來　艱虞あれば却つて來たりしことを悔ゆ
寒燈挑不焰　寒燈　挑ぐれども焰あらず
殘火撥成灰　殘火　撥つれば灰と成る
凍水滴還欲　凍水　滴たりて還た欲み
風簾掩復開　風簾　掩されて復た開く
熟知文有忌　文に忌むこと有るを熟知するも
情至自生哀　情至れば自から哀しみを生ず

放浪と貧苦の生涯を送つた下級官吏のこの詩人の詩は、悲哀に滿ちざるを得ない。「文章は尤も數々悲哀なるを忌む」と王安石が「李璋下第」の詩に言うように、王安石や蘇軾等は悲哀をのりこえ平靜を得ようとする方向をもつ。それは彼等が、政府の高官であり、學者であり、文學者であるという、文化全體の指導者の位置にあるからこそ可能であつた。詩が彼等の人生において、そのすべてではなく一部であつたからである。陳師道においては、詩は自己の存在と同じ重さを持つものであつた。このように詩人の社會的立場の差は、詩人の素質・教養の差とともに、陳師道を境として、詩意識と詩法に大きな變化をもたらす最大の要因となつているのである。

陳師道は奇しくも蘇軾と同じ沒年（一一〇一年）をもつて、その四十九歳の生涯を閉じたが、貧乏のために葬儀も出來ず、友人の鄒浩が棺を買つて彼の遺骸を納めたと傳には記している。

「寒夜」の詩が、「留滯」「艱虞」「風簾」など杜甫の詩語を含み、(注5)その表現も杜甫に似るように、その一生も杜甫の如く憂いのうちに終始した。しかし、杜甫がより普遍的な憂いであつたのに比べ、陳師道のそれは、より個人的な、內向的なものに終つている。彼は「情生ずれば文は自から哀し、意動けば足も復た佇む」（和魏衍元夜問寄黃樓・卷六）と言うが「詩は志をいう」ものであり、心が行動を規制する如く、彼の詩も、彼の心をそのまま詩語に定着するしかなかつたのである。蘇軾も幾度か配流の憂きめにあい、悲哀の大きかるべき生涯であつたが、彼はその悲哀を超えようとする精神の强靱さを持ち、悲哀を消すすべを心得ていた。感情的で內向的な陳師道にはそれが無い。これが陳師道を蘇軾の詩よりは杜甫の詩に近づけた原因であろう。

三、その詩論

陳師道は「後山詩話」と呼ばれる一卷の書を遺しているが、それから彼の詩論を考察すると、「杜甫の詩は最高のものであるから、それを規範として詩を作るべきである」ということに集約することができる。

杜甫の詩の顯彰は、唐代においては元稹・韓愈にその例を見るが、まだ一般的ではなかつた。それが宋代になると、王禹偁が「韓柳の文章李杜の詩」（贈朱嚴）「子美の集は開く詩の世界」（長篇仲威）といつた認識を持ち、詩においては特に杜甫を學ぼうとしたのに始まり、やがて王安石・蘇軾によつて杜詩が極めて高く評價され、黃庭堅に至つては極端なまでに杜詩に傾倒したことは周知の事である。陳師道はこれらの杜詩顯彰を繼承しているが、詩話に見る範圍では、特に蘇軾と黃庭堅の杜詩に關する語が中心となり、陳師道の認識への源を示している。

蘇子瞻云ふ、子美の詩・退之の文・魯公の書は皆な集大成なるものなりと、

これと殆んど同文がもう一條、蘇軾の言として引かれている、蘇軾が詩の可能性は杜甫に盡くされているとして「詩の能

事は杜甫に畢れり」と歎じたその認識が、そのまま彼に繼承されているのである。陳師道自身の言葉で言えば、

余、多景樓に登り、南のかた丹徒を望むに、大白鳥の飛びて青き林に近づく有り。しかして句を得て云ふ『白鳥林を過ぎて外明を分つ』と。謝眺亦た云ふ、『黄鳥青き林を度る』と。語は巧みなれど弱し。杜云ふ、『白鳥邊明に去る』と。語は少くして意は廣し。余、里に還るごとに毎に老いを覺え、復た句を得て云ふ、『坐の下に漸く人多し』と。しかして杜云ふ、『坐深くして鄉里敬す』と。語益々工なり。乃ち杜詩に有らざる無きを知るなり。

ということになる。杜詩の内容を適確に表現しながら、深い餘情をもつ表現のたくみさと、到らざる所のない詩境、素材の豐富さとを認め、それを高く評價するのである。大體、詩を享受する場合、その詩の内容と表現とは切り離せないものである。陳師道も「語」と「意」の兩面より杜詩を見ているが、彼がより強く注意を向けるのは「語」の面についてである。例えば、王維の七言句の「九天の宮殿閶闔を開き、萬國の衣冠冕旒を拜す」に對して、杜甫の五言の句の「閶闔黄道に開き、衣冠紫宸を拜す」の方が「語益々工なり」と見ている。また杜牧の警絶とされる「南山と秋色と、氣勢兩つながら相高し」の句と比較して、杜甫の「千崖秋氣高し」と一句で表現した句の方が、「語益々工なり」と斷定している。杜甫の「秋月解く神を傷る」の句が、蘇軾の秋月の詞よりも、「語簡にして益々工なり」と言うのも、(注6)表現のたくみさに焦點をあてて見た批評である。古人の詩の一二句を取り上げて、その表現の工拙を論ずるのは、「詩話」の流行につれて北宋末より南宋末まで段々と盛んになる「摘句」の法であるが、この摘句は一句または二句の内に一點の情景をいかにたくみに表現しているかにその觀點が存し、詩全篇を通じて、その詩の内容と表現の工拙を見ようとするものではない。陳師道が杜甫の詩から學び取ろうとするものも、句における表現の工なのである。

詩を學ぶには當に子美を以て師と爲すべし、規矩有り、故に學ぶべし。退之の詩に於けるは本解する處なし、才の高きを以て好きのみ。淵明は詩を爲さず、其の胸中の妙を寫すのみ。杜を學んで成らずとも、工たるを失はず、韓の才と陶の妙なくして其の詩を學ばば、終ひに樂天たるのみ。

思うに、學才の高さ、哲理を深めた精神の流露としての詩は學び難く、下手をすると白樂天の平易な俗っぽさに流されてしまう。しかし、杜甫の詩は詩法が正しく、規範としてよい。もしそれを學んで十分にいかなくても、工を失うことはないとしている。このような點において、陳師道は杜詩を學ぶ可能性を見出しているのである。蘇軾が杜詩を高く評價し、また陶淵明の詩を最も好んで和陶詩（陶詩の全作品に和韻した詩）を作つた意識の中には、杜詩や陶詩の詩形式に對するよりも、より強く彼等の詩精神への共感があつた。また、當時においては、「文は意を以て主と爲し、文詞はこれに次ぐ」（中山詩話）と言うように詩文の表現よりもその內容を重視するのが一般であつた。表現はむしろ平易拙朴であつても、內容に不盡の意がなければならぬとしたのである。韓愈に傾倒した歐陽脩（注7）や、陶淵明に傾倒した蘇軾等の詩は、哲學性に富み、詩が理知の表出の場となつている。陳師道は、このような達意の詩、議論を以て詩を作ることには反對する。蘇軾の詩を疎に過ぎると批判するのはその現われである。彼は詩としての密度がうすいのは認めない。詩には緻密さが必要であると考えているのである。

陳師道は詩において「語と意の工」を求め、語と意の工が一體となつたものを良しとしている。例えば、「望夫石に關する詩句は古今一律」であるが、夢得の「望み來たること已に是れ幾千歲、只だ似たり當年初めて望みし時に」の句は「語拙なりと雖も意は工なり」と評し、顧況の「山頭の日日は風　雨に和す、行人歸り來たれば石も應に語るべし」の句は、「語意皆な工なり」と彼は言う。「意の工」とは、單に詩の內容の深さを言うよりは、右の例を見るように、表現の因となる發想のたくみさを言うのである。すぐれた發想のうえに、「語の工」が加われば最上のものとなる。語の工とは、ただ修辭に技巧をこらせばよいと言うのではない。彼は、かつての西崑體の詩のような、錦を連ねた如き華麗な修辭は否定している。「寧ろ拙なるも巧なる毋れ、寧ろ朴なるも華なる毋れ、寧ろ粗なるも弱なる毋れ、寧ろ僻なるも俗なる毋れ、詩文皆な然り」という如く、技巧の露わな修辭を斥け、技巧を感じさせないでいて、しかも詩意を適確に表現した詩語を語の工と言つているのである。

さらに、このような「意の工」と「語の工」この兩者が一體となつた姿を、彼は「奇」と呼ぶ。「奇」の意味は、彼が詩話の中で「世人が范文正公の岳陽樓記を奇と爲すが、それは唐の小說である傳奇の體に過ぎない」と斷わつているように、普通に用いられる單なる怪奇なもの、もの珍らしいものというのではない。またそれは無理に作られた表現の奇拔さでもない。彼の奇は「ひらめき」または「さえ」とも言うべきものなのである。彼は、黃庭堅の詩の奇が杜詩の奇に及ばないのは、それが作りもので、奇と見せかけることが露わに過ぎるからであり、杜詩の物に卽して自然と成つた奇こそ本當のものであるとしている。また彼は、人がただ奇を好み、奇なる表現を作り出そうとしても、それで出來るものではないと言う。

楊子雲の文は、奇を好んで卒に奇なること能はず、故に思は苦しみ詞は艱む。善く文を爲す者は事に因りて以て奇を出すなり。江河の行くは順に下るのみ。其の山に觸れ谷に赴き、風に搏たれ物に激され、然る後に天下の變を盡くす。子雲は惟だ奇を好むが故に奇なること能はざるなり。

彼は、「詩は其の好なるを欲すれば、則ち好なること能はず」とも言うが、奇についてもそれは同じである。無理に奇であろうとしても、結果は似て非なるものとなる。「物に遇い」「事に因る」のでなければならない。作者の心と對象の兩者の在り方によつて、さえた發想が生じる。長江や黃河は自然の形に沿つて流れ下るが、その時、岩を嚙み谷を走り、千變萬化する。このように心を對象の中に融け込ませ、對象に委ね切る。そこに變化に富み、しかも澁滯しない、斬新で多樣な詩が生まれるのである。奇とは、樣々な技巧を止揚した表現の極と考えられているのである。

陳師道は、杜詩を學ぶことによつて、上述の如き詩論を得ていた。しかし、彼には、詩才においても、また詩を創作する場という點においても、杜甫とは大變異なるものがあつた。それ故、詩論の實踐には我身を削るような努力が必要であつたのである。四庫提要に彼の詩を評して、「絕句は古詩にしかず、古詩は律詩にしかず、律詩にては則ち七言は五言にしかず」と言つているように、陳師道は律詩に、中でも五律にすぐれている。彼が雕琢を最も要求される律詩に力を注い

だことは、杜詩の繼承を意識してのことである。北宋においては、思想を述べるに適したものとして、古詩の形式が好まれていた。その中にあつて、律詩に重點をおく彼の詩は、その詩論の實踐の現われなのである。彼が詩語の雕琢に苦しんだことは、當時から有名であつた。黄庭堅が「門を閉じて句を覓む陳無己」（病起荆江亭即事）と詩に詠み、また同時代の葉少蘊が「世に言ふ。陳無己は毎に登臨して句を得れば、即ち急ぎ歸りて一榻に臥せ、被を以て之を蒙り、之を吟榻と謂ふ。家人は之を知り、即ち猫犬は皆な逐ひ去らしめ、嬰兒稚子も亦皆な抱持して鄰家に寄す。」（石林詩話）と傳えている。彼は極端なまでの苦吟の果てに詩を創り出していたのである。詩の好や奇は、無理に求めて出來るものではないと言いながら、實際には苦吟せざるを得なかつた所に、詩に自己の全存在をかけようとする陳師道の執念を見る。彼は「語の人を驚かさずんば死すともやまじ」という信念に固まつていたのである。(注8) 彼の生涯は悲哀に滿ち、窮乏の日々は自からに人生をはかないものとさえ感じさせるほどであつた。それ故、彼においては、自己の命を確かな詩語に定着させることによつて、自己の存在のあかしをうち立てることが必要であつたのである。そこには、文學は價値ある業であるとする考えがなければならない。彼は「文章は末技なるも將に自から效あらん、語の人を驚かさずんば神も嚇るべし」（出清口・卷二）と考え、表現の工に骨身を削ることに、その價値の確かな存在を感じていたのである。それが彼に、人を驚かすような「奇」なる表現を第一のものとさせたのではなかろうか、

陳師道が不遇と貧窮の生活の中にあつて、詩作に精進し得たのは、蘇軾やその門下の詩人達との出合いによる文學への開眼と、そこから得た文學に對する自信とによつてであつた。歐陽脩の言に、「詩の能く人を窮するにあらず、殆んど窮する者にして、しかる後に工なるなり」（卷9）というのがあるが、陳師道もまた、「人の自から窮するは詩によるにあらず」（次韻蘇公涉潁・卷三）と考えているのである。自己の不遇を歎いてばかりはいない。それをかえつて文學の糧としようとするのである。人は社會的に不遇であれば、社會に發揮し得ないエネルギーを、自己の文學に十分に發揮することが出來る。杜甫がそうであつたように、名ある文學者は多く困苦窮乏の中にあつたからこそ、すぐれた作品を生み出し得たではないか。こ

のような認識が、彼を詩作に打込ませ、詩の表現の形成に自己をかけさせたのである。文學が現代の如く、生活の直接の糧となることのない時代に、彼のように「此の生の精力は詩に盡く」（絳句・卷四）とその人生のエネルギーを詩に注ぎ盡くすことは、文學は人生をかけるに値するものという信念がなければ出來ないことなのである。

陳師道の文學に對する信念、また新しい詩語を創り出そうとするその表現論、それらは論としては正しいものと言える。文學とは、深い思索と、ものの存在を見据える確かな眼によつて、把握し得た新しい眞實の發見を、それにふさわしい最も適確な言葉によつて表象する營みだからである。だが、陳師道は詩におけるその表象の方法を擬古的なものに求めた。それも、當時盛んに試みられていた、例えば秦觀の擬唐詩や蘇軾の和陶詩の如き、古人の作品そのものに擬えるのと異なり、彼の擬古は詩語や詩句に限定されているのである。彼には「擬――」と題する詩はない。大體、擬古の詩を作る場合、單に形式や構成をまねるもの、詩語をまねるもの、詩句の發想をまねるものなどが考えられるが、陳師道の場合は、後の二者であることが多い。彼の詩のどれにも杜甫の詩語がいくつか用いられており、登臨の詩などは發想をまねている。前述の「別三子」や「寒夜」の詩はその例證となろう。だがこれらは、杜甫が六朝詩を學びながら、それをすつかり自家藥籠中のものとしているのとは異なる。陳師道は杜詩を規範としながらも、その詩の多くは生のままで杜詩の形をとどめ、模倣に終つているのである。ここに、杜詩の表現形式に重點を置き過ぎた彼の詩法の短所と、そこから創り出された詩の限界が認められるのである。

四、結　び

陳師道の詩には、詠物の作が少ない。大半が詠懷の作である。その詠懷も、不遇の生涯からくる悲哀感に滿ち、自己の人生に對する詠歎にとどまつている。彼の眼は自己の內部またはその周邊に向けられ、廣く社會全體の在り方に向けられていない。彼の詩に社會性が稀薄であることは既でに述べたが、彼の詩論においても、從來の詩人が常に口にした、傳統的な詩觀である政治的詩論、卽ち詩は社會の良心であらねばならぬとする論は全く見られない。それは、宋詩の風を拓い

た梅堯臣が、微官にあつて貧苦に惱み、また感情の人でもありながら、常に詩は大雅を志さねばならぬと意識していたのに似ない。まして杜甫が強烈な儒家的意識を持ち續けたのには全く似ない。詩においてこのような意識が不可缺のものであると言うのではない。ただ詩人を支えている根本的な意識を抜きにして、その詩を規範とすることは問題なのである。陳師道は杜詩を規範とすることを志しながら、杜詩の一面しか見ず、表現の工にとらわれて、その詩語に密着し過ぎたために、彼の詩も杜詩の模倣の域を出ることが出來なかつたのである。文學史の上から言うならば、彼の詩論は、蘇軾等の饒舌な詩風への反省から出ながらも、彼の詩は、それを越える新しい發展を見せることなく、ただ唐詩への回歸を強める契機となるにとどまつてしまつたのである。なお、陳師道や黄庭堅を通して杜詩を繼承する江西詩派になると、字眼を練るとか造句の法にこだわり、また典故の穿鑿や換骨奪胎といつた行き過ぎを生じているが、この點については、稿を改めて論じたい。

（本學助手）

注1　拙稿「梅堯臣の詩論」（漢文學會會報・第二十四號）參照。

注2　以下の詩及び卷數はすべて、宋の任淵の注になる「後山詩注」十二卷による。

注3　任淵の注は、さらに楚辭・陶淵明・李白などの詩句を引いて、その典據としている。

注4　詩集の卷一より卷四の半ばまでの百十五首が第二期の作であり、卷四の後半から卷十二の終りまでが第三期の作である。なお、この詩集は任淵によつて、編年の形に集められている。

注5　杜詩の原文は、「留滯才難盡、艱危氣益增」（泊岳陽城下）、「創跡共艱虞」（贈高式顏）、「風簾掩不定」（雨）である。風簾の句などそのままの踏襲と思われる。

注6　蘇軾の詞は「不似秋光、只與離人照斷腸」という句を引用している。

注7　「歐陽永叔不好杜詩、蘇子瞻不好司馬史記、余每黄魯直怪嘆、以爲異事」の文がその詩話に見える。歐陽が韓愈を好み杜甫を好まぬことに不滿の意がうかがわれるのである。

注8　この句は杜甫の「爲人性僻耽佳句、語不驚人死不休」（江上値水如海勢）にもとづく。

注9　歐陽脩の「梅聖俞詩集序」の言葉であるが、蘇軾にも「非詩能窮人、窮者詩乃工、此語信不妄、吾聞諸醉翁」（脩惠勤初罷脩職）の詩があり、陳師道が直接どちらによつたかは不明。ただ蘇軾も歐陽脩から聞いたというように、歐陽から出た言である。